

エネルギーの釣合いに基づく

構造物の耐震設計法の確立と普及に対する功績

名誉会員 秋 山 宏 君

秋山宏君は、1962年に東京大学を卒業後、同大学院に進学し、1965年に博士課程を中退して東京大学助手に採用され、その後、講師、助教授を経て1991年に教授に昇任し、溶接工学講座、建築構造学講座を担当した。1999年に定年退職後は、日本大学理工学部教授として、引き続き学部および大学院の教育に従事し、2008年の退職後も、非常勤講師として教育に携わっている。この間、東京大学名誉教授の称号を授与（1999年）されている。東京大学、日本大学在職中には、一貫して鋼構造の終局強度や耐震設計法の研究に勤しんだ。

同君は、学位論文の主題である鋼構造骨組の耐力の研究を開始以来、長年にわたって座屈現象などエネルギー吸収能力に影響を及ぼす各因子を踏まえた鋼構造物の終局強度や地震によるエネルギー入力に関する研究に従事し、骨組の有するエネルギー吸収能力と地震によるエネルギー入力との対比による新たな耐震設計法を開発した。研究対象とした鋼構造は、建築物に限らず原子炉容器や石油タンク、鉄塔など広範に及んでいる。これらの研究業績に対して1987年に日本建築学会賞（論文）を、1988年に日本原子力学会賞（技術賞）を受賞している。また、構造種別によらず汎用的なエネルギー入力の考え方を免震構造へ適用する研究にも発展させている。これらの研究成果は、1990年に『建築耐震設計における保有耐力と変形性能(1990)』『容器構造設計指針・同解説 [第2版]』、1993年に『免震構造設計指針 [第2版]』の刊行という形で本会から発信され、研究だけでなく実務設計に大いに役立つものとなっている。

一方で、2005年に建築基準法の耐震規定として国土交通省告示第631号「エネルギーの釣合いに基づく耐震計算等の構造計算を定める件」が新設されている。この告示は、2000年改正建築基準法の性能規定化を高度化するもので、同君が長年にわたって従事してきた研究成果が法令に位置づけられたものであり、耐震設計実務への寄与は極めて大きい。

また、同君は国内外の耐震設計にかかわる後進の指導に終始携わり、同君の著書を英語のほか、スペイン語、中国語、韓国語に翻訳し、国外の実務者へもわが国の耐震設計を広く普及させる活動を継続しており、各方面で活躍する人材を多数育成した。その功績は外国でも高く評価され、清華大学（中国）をはじめとして、韓国、スペイン、ペルーの各大学で講義を行っている。

このように、秋山宏君は、20世紀後半から今世紀初頭に至る耐震工学の系譜において、建築構造物だけでなく容器構造など各種の構造物に必要とされる強度、靱性の意味を、エネルギーの釣合いに基づく耐震設計法により明らかにし、わが国の研究を主導している。また、これらの活動・功績を通して、日本を代表する構造研究者として世界的にも高い名声を広く得ている。

よって、同君の功績に対して、ここに日本建築学会大賞を贈るものである。